

資 料

「無意識」の歴史的現象学 (3) : 告解 (告白) ・ 対人援助職
— 科学史におけるフロイトのパラダイム・シフト —

森 谷 寛 之

はじめに

筆者は (森谷 2022b, 2023a) において、フロイトが発見し発展させた精神分析を科学史上に位置づける試みをしてきた。精神分析理論の中核となるのは「無意識概念」である。しかし、この無意識概念は、科学史上におけるもっとも奇妙な概念である。

数学を専攻した筆者の友人は「数学では言葉 (定義) の意味が無矛盾であること (well defined) を証明してから使います」と指摘した。しかし、無意識概念は「知っているが知らない」と最初から矛盾を含んでいる。世間では単に「知らない、気づかない」ことを無意識と呼んでいるが、それとは違う。世間ではこのような両義性は「二枚舌」と呼び、忌避される。そのために無意識概念は世間では誤解され、受け入れられないでいる。また、多くの心理学者でも世間が納得できるような説明ができない。そこで本論では、無意識とは何かを少しでも理解可能となるように、視覚的素材をもとに説明を試みてきた。

森谷 (2022b) では、まず、フロイトの精神分析実践を象徴する「寝椅子による自由連想場面」(カウチ図) を原点に置き、それと物理学 (ガリレオの天体観測図)、近代医学 (レンブラント作「チュルプ博士の解剖学講義」図)、さらに教育 (孔子像)、宗教 (「明恵上人樹上坐禪図」) と対比させた。その結果、フロイトの精神分析は、物理学、医学、教育、文学・芸術、哲学・宗教などあらゆる学問分野と密接不可分に結びついていることが分かる。しかし、同時にこれらの諸学とはまったく異なる独自の位置を占めることを明らかにしてきた。フロイトの精神

分析はあらゆる諸科学と深く関係しているが、同時にそれらとはまったく違う独自の位置にある。

第2報 (森谷 2023a) ではフロイトの精神分析と錬金術・近代化学とを比較対照した。まず、自然科学を支える物理学と化学の科学史上の違いを対比し解説した。物理学に比べ目に見えない微小な世界を探求する化学は、物理学に比べ発展がかなり遅れた。この二つの科学は19世紀後半、二つの性質の異なった心理学の誕生を促したと位置づけた。すなわち、心理学は「精神・物理学」(19世紀半ば) と「精神・分析」(19世紀末) の二つの誕生があり、前者は物理学、後者は化学をモデルにしている。「分析」という用語自体が化学との親和性を示している。心的要素を想定し、その要素間の組み合わせを考えるのは化学結合に由来する。「コンプレックス」(錯体) とは化学用語でもある。化学の前身である錬金術は、ラボアジェに始まる近代化学成立によって非科学的とみなされ否定されてきた。しかし、ユングは、錬金術は物理化学的事実ではなく、むしろ普遍的無意識を表現した貴重な精神遺産として再評価した。こうして錬金術は現代によりみがえることになった。

本論文では前報では取り上げることができなかったことを取り上げ、論じたい。

森谷 (2022b) では宗教分野から象徴として、東洋の瞑想を取り上げたが、キリスト教には触れなかった。そこで今回はキリスト教の「告解 (confession)」との比較を取り上げたい。告解は「カトリック教会で、洗礼を受けた後に犯した罪を、司祭を通して神に言い表す行為。赦しの秘跡の中心的行為。もと『悔悛の秘跡』とも呼ばれた」(広辞苑)。

ここでは特定の宗派に限定しないために、より広い意味を持つ「告白」という言葉を使う。

森谷 (2022b, 2023a) で過去に遡って、科学史上に位置づけてきた。しかし、目を現代に向ける必要がある。フロイトの「無意識」発見以後についても考察したい。

フロイトの精神分析は、人間精神のあらゆる領域にまたがる新たな知の領域を開拓した。それによって精神分析医、精神分析家、カウンセラーなどの新たな職種が誕生することになった。2018 年に「公認心理師法」が成立し国家資格としての心理職が実現した。心理職は歴史上になかった新たな職業である。公認心理師法では、他の対人援助職と連携すべきことが謳われている。他職種として医師、教師、看護師、養護教諭、精神保健福祉士、社会福祉士、家裁調査官、さらにスクールソーシャルワーカーなどが想定されている。現在ではこれらの対人援助職はほとんど「心の専門家」と呼ばれる事態になっている。これら他職種とフロイトとの関係はどうなのかという新たな課題が生じている。この問題について考えてみたい。

また、考察において、科学史の関係書にはフロイトがほとんど無視された状態にあることを指摘した。科学史家には無意識の心理学の意義が理解されるのが困難である。そのためには今後の心理臨床家自身が科学史を学び、自分たちの実践の科学的意義を発信するべきであると提案したい。

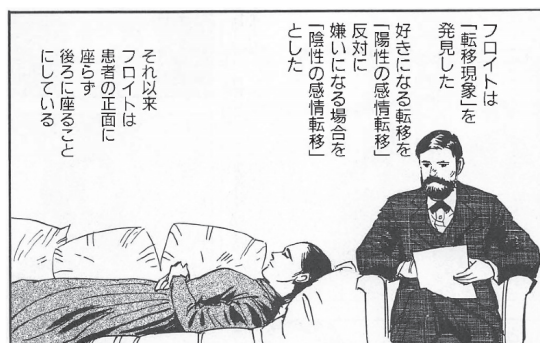
方法

比較対照する基本となる図はこれまでと同じで、精神分析の原点を象徴するフロイトのカウチ図 (図 A) である。

先の論文 (森谷 2022b) では宗教の代表として東洋の禅仏教の「明恵上人樹上坐禅図」(図 C) で瞑想と自由連想を比較対照した。その時、キリスト教の「告解」との対比も意味があるが割愛すると述べた。今回はキリスト教のジュゼッペ・モルテーニ

(Giuseppe Molteni 1800-1867) の「告解 (告白)」(1838) (図 B) を取り上げたい。

次に現代社会における対人援助職の象徴となる図として何がふさわしいのかを検討した結果、看護師像を選んだ。養護教諭、精神保健福祉士、スクールソーシャルワーカーなどはその象徴となる図は現在ではイメージしにくいのに対して、看護師イメージは誰でも心に抱く典型図が存在する。web 上で見つ



図A フロイトによる精神分析
(福島章監修・石田おさむ絵 1999 フロイトの「心の神秘」入門 講談社)



図B Giuseppe Molteni ジュゼッペ・モルテーニ (1800-1867) 「告白」(1838)

けた画像（図 D）を引用させていただく。

結果

① キリスト教の告白とカウチ図

フロイトはユダヤ人であったが、「宗教に無関心なたんなる不信心者ではなく、筋金入りの無神論者」（ゲイ（1988）p.45）であった。東洋の明恵の瞑想画（図 C）では森の中ひとりで自己に沈潜する状況が描かれていた。キリスト教の告白は対話で、一見するとカウチ図と似ている。その違いは何かを検討したい。



図 C 明恵上人樹上坐禅像（高山寺蔵）
Public domain, via Wikimedia Commons

表 1 告白とフロイトのカウチ図

告白	フロイト
・司祭とその信徒	・無神論者のフロイトと一般市民（宗派関係なし）
・司祭は儀式的服装（制服）	・日常の労働着
・十字架など宗教的シンボルをまとう	・筆記具と記録用紙
・制服姿で役割を限定する	・自由であいまいな服装、患者から種々の転移を受ける
・司祭はキリストの代理	・分析家は一個人、科学的知識と技術の専門家
・かつてガリレオを異端裁判に	・ガリレオの科学精神を受け継ぐ
・司祭と信徒を包む絶対者神の存在	・患者と分析家、それを包む無意識の世界
・信徒は外から小窓で声だけ	・患者と分析家は同じ部屋で全身をさらす
・司祭はキリストと信徒をつなぐ	・分析家は患者の意識と無意識をつなぐ
・信徒はひざまずく（上下の関係）	・患者はカウチで横に。分析家は傾聴（水平の関係）
・信徒は犯した罪を告白	・患者は反道徳的欲望でも自由に語る
・秘密を告白し、救いを得る	・何でもおしゃべり。トーキング・キュア
・信徒は罪を語り、司祭は赦しを宣告	・患者は悩みを語り、分析家は傾聴・記録・分析
・告白の秘密は不可侵（教会法）	・守秘義務の職業倫理
・告白の事例を内部で検討？	・守秘義務を守りつつ事例研究、学術的相互批判
・司祭はキリストの代理	・人が人を支える。分析家を支えるその先生（SV）
・経典に基づく霊的指導	・無意識への旅を共にする
・年 1 回の告解が信徒の最小限の責務	・症状から解放されるまで何年も継続
・教会などの共同体の支え	・分析家仲間集団、先輩、学会などによる支え
・伝統を重んじる	・遠慮のない相互批判と新技法の開発
・司祭と信徒は相互に身体的に近い位置	・分析家と患者は身体的に遠い位置。
・物理的仕切りで二人をしっかり隔てる	・分析家と患者は“心理的距離”は近い（共感）
・聖書の教えによる倫理道徳を重視	・倫理道徳は「超自我」、無意識の力動として扱う
・普遍的な神の教えに従うように指導	・無意識世界の探求から普遍的人間理解を目指す



図D 対人援助職のかかわり（看護師と患者）

森ノ宮医療大学 HP

https://www.morinomiya-u.ac.jp/port/maruwakari/kango_kangoshi.php

小林（2010）によると、告解は「第三者に声を聞こえない小さな部屋で信徒はひざまづく。聴罪司祭は小さな隣室で座る。互いに顔ははっきりわからない。小窓を通して声だけ聞こえる」。

フィナテリ・S（1981）によると、「告解は、キリストが教会に残した救いのための可視的手段のひとつ。洗礼によって救われた者が、その後、心ならずも神にそむいたとき、その思い、言葉、行いを、キリストの代理者としての司祭の前に具体的にいいあらわし、赦しを受けるもの。

司祭はそのさい、神に立ち返ろうとしている人に対して、慰めや励ましの言葉を与えることがある。

告白するほうも、良心の疑いをただすなどすることがある。

しかし、それはたんに悩みを打ち明けてさっぱりするためや、人生相談を目的にしたものではない。告解で自分の将来のことを告げられることはない。」

これらに対して「反道徳的欲望などを自由連想していく」フロイトのアプローチとはまったく違うことが分かるであろう。また、フロイトのやり方はガリレオの科学的精神を受け継ぎ、正確に記録し、公に検討し、間違いを修正する。このような手続きが宗教とはまったく異なる。フロイトは学説に間違いがあるという前提があるが、宗教では教えに間違いがあると想定しない。

② 対人援助職との対比—看護師と精神分析家

これまではフロイトと物理学、化学、教育、宗教など、明らかに別の分野と比較対照してきた。まったく別の分野であるが、実は底の部分（無意識）ではつながっているということを明らかにしてきた。

しかし、逆に同じ対人援助職同士の関係はどうなのであろうか。現代では心のケアは、誰でもがいつもしているという認識が広がっている。後述するが、緩和ケアをしている心理臨床家が、看護師から「心のケアは看護師がするので、心理師は担当しないで

表 2 対人援助職（看護師）とフロイト

対人援助職（看護師）	フロイト
・医療者としての看護師の制服	・医師であるが白衣を着ない
・病院内	・病院外の非日常的空間、分析室
・聴診器／体温計／メモなど	・筆記具と記録用紙
・患者への献身とおもいやり	・つねに自分の援助行為の意味を考える
・身体だけではなく心への思いやり	・患者との心の交流を<とてつもなく>重視
・身体の生理的データを重視し扱う	・患者の身体的生理現象は他医師に任せる
・体を第一に心も考える	・心を第一に身体も考える
・投薬、手術に関与する	・話を聞くことが心の薬や手術に相当
・身体に直接触れる	・身体的接触をしない（禁欲原則）
・しっかりと患者に視線を合わせる	・凝視せず。特有のまなざし（平等に漂うまなざし）
・患者の訴えたことを正確に対応	・患者の語らない部分<無意識>にも対応
・自分の感情も素直に表現する	・分析家は自分の感情をそのまま表すことに慎重
・無意識の動きに責任を持たない	・患者と分析家の無意識に責任を持つ

ください」と言われ、ショックを受けたという。いたい心の専門家とは誰か。心理臨床家のアイデンティティの拠り所はどこにあるのか。そこで看護師とフロイトのカウチ図と対照してみた。

社会では看護師の援助行動はよく知られている。世間のひとびとが持つ良好な対人援助のイメージでは図 D になるだろう。それに比べて、図 A はよそよそしい印象を与え、真剣に援助しようという誠意を感じることができないであろう。フロイトは、援助の意味を非常に慎重に考えている。援助した方がよいのか、否か、援助したら後はどうなのか、などかわりのあらゆる事態を想定しながら、注意深くふるまっている。しかし、こうしたフロイトの意図や方法はなかなか理解されにくい。このように対照表を作ること、フロイトの立場が少しは理解できるようになったのではないだろうか。

考察

科学史とフロイト

筆者は論文にまとめる意図・目的を持たないまま、漠然とした興味関心から科学史に関する本を買い集めていた。それがいつの間にかかなりの冊数 (約 30 冊) になっている。今、改めて科学史に関するそれらの本を読み返してみると、フロイトや心理学にはほとんどが触れられないままであることが分かった。とりわけ深層心理学についてどの本も触れていない。意図的に排斥されているわけではないだろうが、自然科学者から見ると心理学、とりわけ深層心理学は関心外にあることが分かる。

その一部を紹介すると、たとえば、次のような本は心理学もフロイトも登場しない。(年号は翻訳年)

- ギリスピー 1965 『科学思想の歴史』
- 広重徹 1970 『科学史のすすめ』
- クーン 1971 『科学革命の構造』
- バターフィールド 1978 『近代科学の誕生上・下』
- R. ハレ 1984 『世界を変えた 20 の科学実験』
- ハンソン 1986 『科学的発見のパターン』

- ロイ・ポーター 1989 『大科学者たちの肖像』
- 端山好和 1989 『自然科学の歴史』
- 渡辺正雄 1991 『文化としての近代科学－この人間的な営み』
- アシモフ 1995 『アシモフの科学者伝』
- nature 特別編集 2002 『知の歴史－世界を変えた 21 の科学理論』
- 矢沢サイエンス・オフィス編 2002 『知の巨人 21 世紀の科学を語る』
- 小山慶太 2003 『科学史年表』
- 安孫子誠也 2007 『はじめて読む物理学の歴史』
- 杉晴夫 2011 『天才たちの科学史－発見にかくされた虚像と実像』
- 小山慶太 2013 『科学史人物事典－150 のエピソードが語る天才たち』
- バイナム 2013 『歴史でわかる科学入門』
- Principe, L.M. 2014 『科学革命』
- 中山茂 2013 『パラダイムと科学革命の歴史』
- 池内 了 2015 『30 の発明からよむ世界史』
- ムロディナウ 2016 『人類と科学の 400 万年史』
- 橋本毅彦 2016 『図説科学史入門』
- 古川 安 2018 『科学の社会史－ルネサンスから 20 世紀まで』
- 小山慶太 2020 『科学史の核心』

しかしながら、科学史の観点から、わずかに心理学、フロイトと精神分析に触れているものとして次のようなものがある。今後はもっと増えていくことが期待できるであろう。

認知発達段階説で有名なピアジェが科学史に取り組んでいる。

ジャン・ピアジェ、ロランデ・ガルシア (1985) は『精神発生と科学史－知の形成と科学史の比較研究』において子どもの精神発達と科学史との比較を試みている。ガルシアは物理学者、認識論者でメキシコ大学教授である。物理学者の協力が必要である。しかし、フロイトへの言及はない。

カンギレム (1991/2003) 『科学史・科学哲学研究』

において「心理学とは何か」(pp.430 - 451)として科学史・哲学的観点から「主観性の科学としての心理学」を論じている。「無意識」という言葉は2回だけ使用されている。

フロイトを一番正当に評価して取り上げているのは次の書である。

メルヴィン・ブラッグ (1998)『巨人の肩に乗って』

ここでは12人の科学者(アルキメデス、ガリレイ、ニュートン、ラバアジェ、ファラデー、ダーウィン、フロイト、キュリー、アインシュタイン、クリック)が取り上げられ、フロイトはその中の重要な一人に位置づけられている。

これはBBCラジオ4の討論番組<スタート・ザ・ウィーク>として企画されたものを書籍化したものであり、各分野の専門家にインタビューしたものである。いわゆる科学史専門の研究者による単著ではない。一人の科学史家の目ではなく、世間一般からの関心に合わせて選考すると、フロイトが選ばれることになったのであろう。

科学史家としては、従来の自然科学と同時に深層心理学を学ぶのは、次元の異なる苦勞が要求されるであろうと思う。

インタビューに答えてフロイトを紹介しているのは、薬理学教授スーザン・グルーンフィールド、精神療法家作家アダム・フィリップス、臨床神経学教授オリヴァー・サックスの3人である。サックスは『妻を帽子とまちがえた男』や『レナードの朝』などでよく知られている。

「フロイトの無意識をめぐる画期的な理論が20世紀のわたしたちの生活全般に与えた影響は、本書に登場するほかの偉人たちと比較しても際立っているといえよう」(フィリップス p.217)。

もっとも重要な発見として「第1に、無意識、それも力動的無意識の発見です」(オリヴァー・サックス p.222)と明確に述べている。

「フロイトの思想、多くの人が想像する以上に幅広く現代社会に浸透している」(グリーンフィールド p.226)

本書は科学史を扱った多くの書のなかで珍しく、フロイトを正当にも評価しているとして、特別な位置にあるということが分かるであろう。

村上陽一郎(2015)『科学の本100冊』には、ユング・パウリの『自然現象と心の構造』と『ユング自伝』が挙げられている。しかし、フロイトについては言及されていない。科学史家の村上は「排他原理」や「ニュートリノ」の発見で有名な物理学者パウリの方に興味の焦点があり、それに関係するユングに関心を向けただけで、深層心理学そのものにコミットしてはいない(森谷 2022a)。

次に紹介するのは、科学史家が心理学そのものをテーマにした書である。心理学者自身が心理学史をテーマにしたものはいくつかあるが、本書は科学史家が心理学の歴史を主題として取り上げている。

トム・ジャクソン著 清水寛之・井上智義訳
(2020)『図鑑心理学－歴史を変えた100の話』
NEWTON PRESS

筆者は第2刷(2021)を2021年11月に書店で見つけ購入した。心理学の歴史における100のエピソードが豊富な図を中心に紹介されている。見ているだけで楽しい書である。

Tom Jacksonはブリストル大学(University of Bristol)で学び、今もブリストルに住む科学史を専門とするイギリスの作家で、ウーパールーパーからゾロアスター教まで幅広いテーマで著書は80冊以上ある、と紹介されている。ブリストル大学は1876年創立の英国屈指の名門大学で、ノーベル賞受賞者を輩出している。監訳者の清水は「記憶におけるリハーサルの機能に関する実験的研究」(1998)、訳者の井上智義は筆者と同じ京都大学大学院教育学研究科博士中途退学で「人間の情報処理における聴覚言語イメージの果たす役割」(1999)などの著書がある。すなわち、著者、翻訳者も心理臨床家とは異なる。

本書では、「4 メスメリズム」、「22 ヒステリー(シャルコーの臨床講義図)」、「26 精神分析」として森谷(2022b)で使った同じ絵が掲載されている。しかし、この3図は100のエピソードの one of

them して並列されているので、読者は3図を系統的に認識しにくいのではないだろうか。森谷 (2022b) ではこの3つのエピソードの関係を「無意識」概念に焦点を当てて系統的に説明しようと試みた。

もっとも興味深いのはその表紙にフロイトのカウチ図 (図 E) がデザインされていることである。心理学の歴史を変えた 100 のエピソードの中でもっとも重要なものがカウチ図であることを意味している。筆者はその選択にまったく賛同する。掲載された 100 のエピソードの他と比較しても、これ以上ふさわしいものがない。

『巨人の肩に乗って』で「(フロイトは) 本書に登場するほかの偉人たちと比較しても際立っているといえよう」(フィリップス p.217) と述べたことと同じである。

現在も実際に心理学界で広くつねに使用され、影響を与え続けている心理学のアイデアは何か、と考えた時、フロイトのもの以上のものはないと言える。

ジャクソンは「精神分析は、自己を表現するための一つの新しい方法を開発し、今や臨床心理学の基礎となっています」(p.38) と述べていることも、筆

者は同感する。しかし、はたして多くの臨床心理学者、心理臨床家はそう思っているのかどうか、筆者は疑問に感じている。なぜなら、もし、「精神分析が基礎となっている」という認識であれば、それが反映するように、臨床心理学のテキストを構成し記述しなければならない。教師もその趣旨に従って講義しなければならないはず。

多くの臨床心理学のテキストを見ると、そうっていない。たとえば、『公認心理師現任者講習会テキスト (2018 年版)』には、そもそも歴史記述が乏しい、フロイトと関係する部分は「力動論に基づく心理療法」(pp.201-205) で実質 4 頁しかなく、「無意識」という言葉も 3 語だけである。

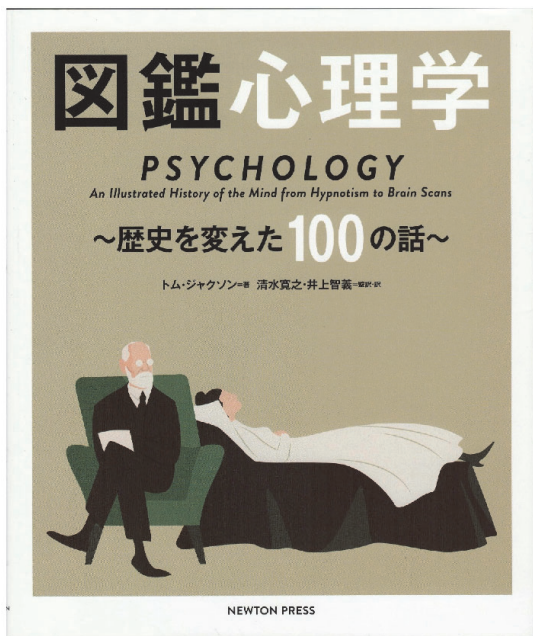
このような事態を鑑み、筆者は従来からフロイトと無意識概念を中心とするテキスト (森谷 2005) 執筆し、これをもとに「臨床心理学概論」の講義をしてきた。

この「はじめに」の部分で、筆者は次のように述べた。

「哲学者の梅原猛は『数ある日本の仏教者から一人を選ぶとすると、法然を選ぶ。なぜなら、法然を原点に取ると日本の仏教の全体を見渡すことができるからである』と述べている (『法然の哀しみ』(梅原猛著作集 10 2000 小学館)。

臨床心理学でも同じことが言える。臨床心理学の分野で数ある人物の中から一人を選ぶとすると、フロイトが選ばれるだろう。なぜなら、フロイトを原点に取ると、臨床心理学の全体を見渡すことができるが、その他の誰を原点に取っても、全体を見渡すことができないからである。…とりわけ、フロイトが『精神分析入門』の最初の講義で主張した点、「無意識仮説」と「対人関係理論」という二つを支柱に選ぶと、不思議なくらい臨床心理学全体を見渡すことができた。…このような視点でまとめたテキストを筆者は他に知らない。この評価については読者の判断にお任せしたい。」

森谷 (2018) 『臨床心理学への招待—無意識の理解から心の健康へ—』は、森谷 (2005) の改訂版で、



図E ジャクソン (2018) 『歴史を変えた 100 の話』の表紙

従来の副題「心の理解と援助のために」を改め、「無意識の理解」を強調し、より徹底した形で本文全体を加筆修正した。

カウチ図の東洋と西洋

トム・ジャクソン (2018) の表紙デザインは、筆者がこれまで考察の基礎においたカウチ図 A (福島・石田 1999) と同じ趣旨であるが、少し印象が異なる。2 枚のカウチ図は東洋と西洋の精神性が投影されていると考えると、二つの図の違いを吟味することの意味あることではなかろうか。そこでそれを対比してみた。

フロイトは実際にどの位置に座ったのかは、筆者はよく知らないでいる。

ロンドンのフロイト美術館 (<http://www.freud.org.uk/>) (図 F) を参照すると、ジャクソンのように左側に椅子がある。しかし、椅子の背もたれがな



図 F ロンドン フロイト美術館

<http://www.freud.org.uk/>

(カウチ上方の壁に「シャルコーの臨床講義図」がある)

いのは、福島・石田のデザインの方が近いと考えられる。

筆者としては、どちらの絵が自分のイメージにぴったりするのか、考えてみると、日本人の手による福島・石田 (1999) のフロイトの絵の方である。日本版のフロイトと患者の関係は、一体感があり患者の状態が見ないでも気配だけで伝わるような印象。西洋版のフロイトは椅子の高い背もたれの印象が強く、フロイトと患者との間に距離感が大きい印象を与える。日本版フロイトは母性的印象を与え、一体感が表現されている。

また、日本のフロイトのまなざしは患者の方を見ていない。これも日本人が互いに視線を合わせるといふことにためらいがあることと関係しているかも知れない。これは瞑想している明恵のまなざし (図 C) に似ていると思う。多くの日本人が会議などの際に、自然に瞑想状態になる、そういう様子を描写しているのであろう。他方、西洋のフロイトは瞑想に沈潜するというよりも、外界に向け何かを探そうというような鋭いまなざしをしている。

心理臨床家にとっての科学史

フロイトを科学史に位置づける作業はとても困難である。科学史に位置づけるのは、いったい誰の仕事か、と問う必要がありそうである。

これに近いのはエレンベルガーの『無意識の発見』であろう。深層心理学の歴史的由来を詳細に紹介している。しかし、他方、自然科学にはあまり触れら

表 3 カウチ図の東洋と西洋

西洋 (トム・ジャクソン 2018)	日本 (福島・石田 1999)
・フロイトは図の左端に座る	・フロイトは図の右端
・椅子が大きい。	・椅子は小さく、ほとんど目につかない
・フロイトの椅子は高い背もたれ	・椅子の背もたれがない
・フロイトと患者の間を椅子が隔てる	・フロイトと患者の間の境界がない
・フロイトは左目から患者を見る	・フロイトは右目から患者を見る
・フロイトのまなざしは患者の方へ	・フロイトのまなざしは自分の内面へ
・聞く姿勢一足を組む、リラックス	・図で足は消えているが、両足を揃える
・二人は少しよそよそしい印象	・患者と一体感のような雰囲気

れていない。

フロイトをはじめ深層心理学を科学史に位置づける専門家はこれまで、少なくとも日本においては誰もいなかったといえることができる。なぜなら、まず、自然科学を学び、その歴史的経緯についての詳しい知識が必要であろう。すなわち、理系の知識と歴史学が必須である。さらに深層心理学の読書による知識だけではなく、その実践経験が必須である。このうち前者、すなわち理系の物理・化学・医学・生物学などの知識、および実験心理学の知識は机上の学習でも十分に間に合う。

しかし、フロイトはそういうわけにはいかない。なぜ、物理…などは机上の学習である程度間に合うが、フロイトだけが違うのかである。すなわち、心理学的にいうと物理…はすべて「意識領域」の作業であるが、精神分析だけは「無意識を扱う」ために異質で“次元”が違うのである。ユング (2003) は「早発性痴呆のまえがき」(1907) の中でこれに対して次のように述べている。

「私の研究を表面的に見ても、私がフロイトの天才的な概念にどんなに感謝を捧げなければならないかがわかるであろう。フロイトはまだ正当に認められてもいないし、評価されてもいず、最高の権威在る社会からも反対されている…。私は、読書を通じて、しかも偶然最初に彼の『夢判断』を読んで彼に注目するようになり、その後彼の著書を研究した。…しかし、私は、精神分析を自分自身反復応用している人だけが、すなわち日常生活、ヒステリー、夢を彼の見地から長く、忍耐強く考察している人だけが、フロイトに反論できると自分に言い聞かせた。それをしない人、あるいはそれができない人は、フロイトに判断を下してはならない。そうしないで判断を下している人は、ガリレオの望遠鏡を通して見ることを拒否した悪名高い科学者のように…」(p.64)

ガリレオは望遠鏡で新たな発見をした時、多くの人に、自分がしたように、実際に望遠鏡で自分の目で見て確かめるように促した。しかし、見ようともしないで、ガリレオを批判し、裁判にかけた人がい

たことをユングは批判しているのである。

そのためにフロイトや深層心理学を位置づける作業を科学史家や歴史学者に任せていることはできない。心理臨床家自身が取り組む必要がある。しかしながら、現在、心理臨床家は文系出身が多く、理系の知識に関心が乏しい。科学史に言及することはほとんどない。この『図鑑心理学』の翻訳者二人も実験心理学者である。

理系出身で深層心理学の両方を学んだ人として真っ先に思い浮かぶのは、筆者の恩師である河合隼雄である。忘れてはならないことは、ユング心理学を日本に本格的に導入したのは、哲学者でも文学者でもなく、非医師で理系出身者の河合である。河合は神戸工業専門学校電気科と京都大学理学部数学科を卒業し、高校の数学の教師となった。そのかわり心理学を学んだ。最初に取り組んだのはロールシャッハ・テストで、それを定量的に研究し、学位を得ている。数学教師としての得意領域を活かし、業績を挙げた。クロッパーについてロールシャッハ・テストを学ぶためにアメリカに留学し、そこでユングと出会っている。

学位を取得したのは、ユング派分析家の資格取得後である。しかし、学位を取得以後、理系的、数学的教養を表に出そうとはされなかった。筆者は河合からロールシャッハ・テストについてのコメントを一度も聞いたことがなかった。1972年に筆者が出会った時、河合はすっかり数学者から別の顔に変化していたように思う。しかし、注意深く河合の書を読むと、理科、数学的思考が随処にみられる。これについてはまた、別の機会にまとめて論じたい。

河合はその後、理系よりも文系の書として世に送ることを好んだようで、理系の教養を表に出すことを控えておられたような印象を受けた。しかしながら、科学史の論文がいくつか見られる (河合 1986、河合・吉福 1986)。

筆者が知る限り、心理臨床分野では河合以外にはこのような研究論文が見当たらないと言っても過言ではないように思う。この二つの貴重な書は、1985

年 4 月 23-29 日に京都国際会議場で第 9 回トランスパーソナル国際会議が開催された時、河合は日本側の組織委員として出席し、発表したことを契機にまとめられている。

その内容を挙げると、

河合隼雄 1986 『宗教と科学の接点』 岩波書店

たましいについて／2 章 共時性について／3 章 死について／4 章 意識について／5 章 自然について／6 章 心理療法について コンステレーション
河合隼雄・吉福伸逸共編 1986 宇宙意識への接近—伝統と科学の融和 春秋社

河合隼雄 1993 『物語と人間の科学—講演集』 岩波書店

1 章 物語と心理療法／2 章 コンステレーション／言語連想テスト／元型／3 章 物にみる東洋と西洋／隠れキリシタン／日本霊異記の宗教性／4 章 物語のなかの男性と女性／5 章 アイデンティティの深化

河合隼雄著作集 11 『宗教と科学』（1994）には河合（1986）の他に「無意識の科学」ほか、「人間科学の可能性」などの論文が集められている。

河合（1986）の「はじめに」の部分で、自分はもともと数学科出身であり、臨床心理学へ転じ、人間を研究対象とする上での方法論、科学論には常に関心を持ち続けてきたが、心理療法の経験が深まれば深まるほど、人間の宗教性について考えざるを得なくなり、文字通り科学と宗教の接点にたたさるることになった、と述べている。

現在、筆者がこれらを読んでも、論議が広がり過ぎて、それを要約し、解説することがむずかしいと感じる。

筆者は、河合と違うアプローチを取ってきた。すなわち、心理臨床家の原点を視覚的表現として選び、それを基点にして物理学や宗教などを象徴する視覚的イメージに対比してきた。その結果、河合のいうような「科学と宗教の接点にたたさる」というジレンマを感じることなくまとめることができた。す

なわち、フロイトのはじめた精神分析のパラダイムは、「科学と宗教の接点」というよりも、すべての諸科学と接点を持ちながらも、しかもどこにも吸収されることのない、まったく新しい独自のパラダイムのはじまり、すなわち「新しい科学」であることが再認識できた。

残念なことに、2007 年 7 月の河合の死後、科学論に言及する臨床心理学者が見られないように思う。河合が健在の頃は心理臨床の世界にはどこか理系の雰囲気が感じられていたが、死後は、その雰囲気が消えたような印象を受ける。また、「無意識」という言葉が死語に近くなったと筆者は感じる。「無意識」を正当に評価し直し、取り戻す必要がある。本論の意図もそこにある。

筆者は修士修了まで物理化学を専攻していた。そのかわり趣味と教養として文学、哲学、宗教書などを読みふけていた。その中にはフロイトやフロムなどの精神分析もあり、興味を持った。そのうちにその両方を活かせる道はないかと考えた時、精神分析がまさにそうだ！と洞察した。精神分析は、哲学や宗教とは違い、人間の精神に科学的方法で探求できる学問と思い、それを選んだ。この最初の発想以後、半世紀も経つがまったく変わることがなかった。心理臨床経験を積んできた今、まさにその通りだと思う。

河合はフロイトとユングの違いを強調しているが、筆者はその違いをあまり感じない。ガリレオか、ニュートンかについて物理学者は誰も問題にしない。二人は＜同じパラダイム＞を共有している。同じようにフロイトとユングは無意識を基本に据えた深層心理学という同じパラダイムを共有していることができる。望遠鏡で見た世界はひとにより異なるかも知れない。望遠鏡を何処に方向に向けるのか、どの倍率で観察するのか多様である。望遠鏡も進歩する。しかし、同じパラダイムである。

しかし、フロイトのカウチ図は、ガリレオ望遠鏡のたとえよりも理解するのがむずかしいようである。遊戯療法を学びはじめた大学院生に、「あなたのし

ている遊戯療法は、フロイトのカウチ図と同じかどうか」と尋ねたことがある。院生は「違う」という。大人の精神分析はそのまま子どもに適用できないので、それを広げるために、遊戯療法が開発された。同じパラダイムであることが理解できないようである。

看護師は身体的ケアだけではなく心のケアもする専門家として位置づけられている。そのためにはフロイトとどう違うのか。看護師自身も心理師自身も互いに分かりにくい。

上述したように緩和ケアの職場で、看護師から「心のケアは看護師がするので、心理師は担当しないでください」と言われたエピソードを紹介した。この時、心理師はそれに反論できなかった。

第27回日本遊戯療法学会大会（2022）シンポジウムでパネリストのひとりが話題提供で「かつてある場で『保育士さんと遊戯療法家とどこが違うのか』という質問を投げかけたら、場が凍ってしまった」というエピソードを語った。しかし、他のパネリストたちは誰もそれをスルーし、答えられなかった。

筆者は、大会終了後、そのエピソードを取り上げて「答えは非常に単純である。すなわち、看護師や保育士は無意識に対してかかわろうとしたり、その責任を持たない。遊戯療法家は無意識を扱う」（森谷 2023b）と説明した。もし、看護師や保育士も「私たちも無意識を扱い、それに責任を持ちます」と主張するのであれば、その時は私たちと同じ心理臨床

家そのものと言える。しかし、その場合、もとの看護師や保育士には戻れないことになる。それはフロイトが医師でありながら、精神分析を始めたおかげで、本来の医師の役割を果たせなくなったのと同じである。フロイトは、自分は本物の医者ではない、と認めている。

その筆者の説明は単純明快であるが、しかし、いざ「それではその無意識とは何ですか?」と逆に訊かれると、たちまち困ってしまう。容易に答えることができない。

そこで少しでもこれについて説明するために、表4にまとめた。

無意識を前提にする活動と、そうでない活動でどのように違うのか。心理相談活動に「無意識仮説」がどこに適用されているのか、筆者の考えをまとめた。

世間一般的な相談活動は、左側である。すなわち、「無意識」仮説を持っていない。相談活動において、相手の話、“言い分”を聞くことは重要である、ということは世間でも常識である。しかし、心理臨床家は「人の話を聞くことは<とてつもなく>重要」と考える。<とてつもなく>というのは、「無意識」のことを念頭においているからである。

心理臨床家の初心者が相談活動を担当すると、すぐに来なくなるということがよくある。いわゆる中

表4 相談活動における無意識のはたらき

無意識仮説がない場合	無意識仮説がある場合
・ご用事（用件）は何でしょうか	・思いつくこと何でも自由にお話してください。
・質問は何ですか？	・なぜ、そういう質問をするのですか？
・鬼ごっこして遊ぼうか（保育士）	・ここでは何で遊んでもいいよ（遊戯療法家）
・用件を正確にきっちりと聞く	・はじめとは別の話に外れてもそれに注意関心を持つ
・用件を聞き、すぐ誠実に返答する	・とにかくさらに聞くことに専念する
・人の話を聞くことは重要	・人の話を聞くことは<とてつもなく>重要
・用件のすみやかな解決策を示す	・聞くだけで、解決策を示すことができない
・即決、続いても2、3回まで	・解決策もないのに、「また、来週」という
・解決策がないと分かるともう行かない	・解決策が示されないのに、なぜか続けて通う
・解決策を知っているのは専門家	・解決策を知っているのはクライアント自身（無意識に知っている）

断といわれる事態である。それは無意識が活性化していないからである。意識領域のことは1時間も話すともう他に話すことがなくなる。しかし、話しているうちに、はじめは予定しなかったような過去の思い出などがよみがえるような場合、無意識の活性化が始まっているといえる。

初回において、クライアントの無意識が活性化すると、次週以後も相談は継続される。そのためには、あらかじめセラピスト自身の方に「無意識」の感受性が準備されている必要がある。セラピストにその準備がない場合、クライアントは自分の無意識を活性化させることができない。たいていは5回以内で相談が終わる。思い起こすと、河合が1965年に帰国するまでの相談というのは、せいぜい5回までであった。それ以上、続くことは考えにくかった。続けて来られても、どうしてよいか分からなかった。何が生じていたのか分からないので、セラピストの方が不安になる。

5回以上は無意識が関与しているので、通常の相談(意識)とは別の次元に入っている。そのことが分かるようになったのは、無意識世界を理解していた河合の指導があったためである。

まとめ

森谷(2022b, 2023a)で触れることができなかった課題、「キリスト教の告解(告白)、および現代の対人援助職とフロイトの違い取り上げ、考察した。

前報と同じくフロイトのカウチ図を原点にとり、それと比較対照し、その違いを考察した。

告解については「モルテーニの告白(1838)」を選び、カウチ図と比較した。

神との関係に赦しと救いを求める告解(告白)と、「無意識」を探究することによる心理的解決の目指すフロイトの違いを明らかにした。

多くの対人援助職も心のケアをしている。それとフロイトとどう違うかを検討するために「看護師が患者とかかわる図」を引用した。

看護師は、患者に対して献身的に、誠心誠意向き合っている。視線もきちんと患者にさせている。しかし、フロイトは援助行為すること自身の意味について無意識を含めて考えている。また、独特の視線や表情など看護師とフロイトは違うアプローチを示していることを明らかにした。看護師とフロイトの違いは「無意識」を前提にしているか、否かにある。

フロイトの精神分析は、わずかの例外があるが科学史にほとんど取り上げられないままである。日本では河合隼雄のみが、この問題に関心を寄せ、少ないがいくつかの論文がある。筆者のアプローチと河合のアプローチの違いについて説明した。すなわち、筆者は考察の原点となる視覚イメージを提示し、それらを互いに比較することで明確にできた。

文献

- ジュルジュ・カンギレム 金森修監訳 科学史・科学哲学研究 法政大学出版局 (Georges Canguilhem 1983 *ÉTUDES D'HISTOIRE ET DE PHILOSOPHIE DES SCIENCES*. Librairie Philosophique J. Vrin, Paris)
- メルヴィン・ブラッグ 熊谷千寿訳 1999 『巨人の肩に乗って』 翔泳社 (Melvyn Bragg 1998 *On giant's shoulders*. 1997/8 BBC.)
- フィナテリ, S. 1981 キリスト教の常識 講談社
- フロイト美術館 (ロンドン) <http://www.freud.org.uk/>
- ピーター・ゲイ 鈴木晶訳 1997 フロイト1 みすず書房 (Peter Gay 1988 *Freud — A Life for Our Time*. W.W.Norton & Company, Inc., New York / London.)
- 福島章監修・石田おさむ絵 1999 フロイトの「心の神秘」入門 講談社
- 一般財団法人日本心理研修センター監修 2018 公認心理師現任者講習会テキスト (2018年版) 金剛出版
- トム・ジャクソン著 清水寛之・井上智義訳 (2020) 『図鑑心理学—歴史を変えた100の話』 NEWTON PRESS (Tom Jackson 2018 *PSYCHOLOGY: An illustrated history of the mind from hypnotism to brain scans*. Worth Press Ltd, Bath England.)
- C. G. ユング 安田一郎訳 2003 分裂病の心理 青土社
- 河合隼雄 1986 宗教と科学との接点 岩波書店
- 河合隼雄・吉福伸逸共編 1986 宇宙意識への接近—伝統と科学の融和 春秋社
- 河合隼雄 1993 物語と人間の科学—講演集 岩波書店
- 河合隼雄 1994 宗教と科学 河合隼雄著作集第11巻

岩波書店

看護師の図 2024 森ノ宮医療大学 HP

https://www.morinomiya-u.ac.jp/port/maruwakari/kango_kangoshi.php

小林哲郎 2010 心理療法とキリスト教に関する一考察

堀尾治代・豊田園子・菅野信夫・仲 淳・森岡正芳・千原雅代・高月玲子・高森淳一・小林哲郎・館 直彦
心理臨床と宗教性－臨床家による多角的アプローチ
創元社 pp.166-189.

Giuseppe Molteni ジュゼッペ・モルテーニ「告白」(1838)

<https://publicdomainq.net/giuseppe-molteni-0030155/>

森谷寛之 2005 臨床心理学－心の理解と援助のために－
梅本堯夫・大山正監修 コンパクト新心理学ライブラリ 11 サイエンス社

森谷寛之 2018 臨床心理学への招待－無意識の理解から心の健康へ－ 梅本堯夫・大山正監修 新心理学ライブラリー 12 サイエンス社

森谷寛之 2021 巻頭言『無意識の発見』とその後 箱庭療法学研究 33 (3), 1-3.

森谷寛之 2022a 書評 ユング『パウリの夢』 箱庭療法学研究 35 (1), 103-107.

森谷寛之 2022b 「無意識」の歴史的現象学－科学史におけるフロイトのパラダイム・シフト 京都文教大学臨床心理学部研究紀要 15, 67-84.

森谷寛之 2023a 「無意識」の歴史的現象学 (2): 錬金術と近代化学－科学史におけるフロイトのパラダイム・シフト－ 京都文教大学臨床心理学部研究紀要 16, 49-67.

森谷寛之 2023b 読書案内: 無意識仮説の重要性を知るための3つの書－遊戯療法と保育の違いについて－ 遊戯療法学研究 22 (1), 109-111.

村上陽一郎 (2015) 『科学の本 100 冊』 河出書房新社

ジャン・ピアジェ, ロランデ・ガルシア 1985 『精神発生と科学史－知の形成と科学史の比較研究』新評論 (Jean Piaget & Ronaldo Garcia 1983 Psychogénese et des Sciences, Flammarion)

明恵上人樹上坐禅像 Public domain, via Wikimedia Commons

梅原 猛 2000 『法然の哀しみ』(梅原猛著作集 10) 小学館

Abstract

Historical Phenomenology of “Unconsciousness” (3): Confession/Human Service Professionals — Paradigm Shift of Freud in Scientific History —

Hiroyuki MORITANI

Based on Moritani (2022b, 2023a), I discuss the significance of Freud’s psychoanalysis in scientific history. For the discussion, I have chosen the couch, considered as Freud’s psychoanalysis symbol. For the confession, I have chosen “The Confession” of Molteni (1838) and compared it with Freud’s psychoanalytical method.

I have clarified the difference between confession to seek pardon and salvation in the relationship with God and Freud’s method of aiming at psychological resolution by searching for “unconsciousness.”

At present, many human service professionals address aspects of mental health. In order to discuss how their approach differs from that of Freud, I have chosen a picture of “a nurse involved with a patient” and compared it with the illustration of Freud’s couch.

A nurse is devotedly and sincerely facing a patient and making eye contact with the patient. By contrast, Freud considers the meaning of the act of human services while including unconsciousness. It is clarified that Freud’s unique eyes, attitude, and expression are different from those of the nurse. I discuss that the difference between the nurse and Freud is whether they adopt the assumption of an “unconsciousness” or not.

With a few exceptions, Freud’s psychoanalysis has hardly been dealt with in scientific history. In Japan, only Hayao Kawai was interested in the relationship between science and depth psychology and has written some articles on the relationship between them. I have discussed the difference between my approach and Kawai’s approach. That is, I have presented the visual images that are the starting point of discussion and clarified the difference in their essence by comparing them with each other.

Key words : Freud, discovery of unconsciousness, historical phenomenology, confession, nurse